

特別インタビュー

中曽根康弘元首相に聞く
「外交の
要諦を話そう」

聞き手：鈴木美勝（本誌編集委員）

鈴木 本日は、お忙しいところ、ありがとうございます。

2009年秋、政権交代によって民主党政権が誕生し、鳩山由紀夫氏が総理になり、外交を推し進めました。その鳩山さんは2010年6月初めに退陣しました。この間、米軍の普天間基地移設問題では迷走して、日米関係がどうなっていくのか、国民の目にも先が見えない外交を進めている感じがあったと思いますが、この8カ月半の鳩山外交を中曽根先生はどのように見ていたか、というところから伺いたいと思います。

外交の軸を確立すべき

中曽根 自民党時代と比べてみますと、外交の軸が確立されていません。国民的な、あるいは外国か

らの日本に対する信頼感が非常に薄れて、自民党時代の日本に対する感じと、鳩山時代あるいは菅時代の日本に対する感じが大きく変化してきて、日本が劣弱の地位に陥ってきている。今の鳩山・菅外交というのは軸をしつかり確立するように、至急立て直さなければいけない。それが目下の最大の仕事です。

鈴木 軸というのは、座標軸以外に、日本の主体的な外交の軸がないということですか。

中曽根 そうです。日本外交は日本固有の外交的主張や、政策・戦略があつて、それと、アメリカを中心にする外交戦略と調整をしながらか進められてきたと思います。特に、サンフランシスコ講和条約が成立して以後の自民党政権は、

日本の主体性確立という点に非常に努力してきました。

例えば冷戦期において、自民党政権の仕事は国権回復にありました。鳩山さん（二郎元首相）の時代には、吉田さん（茂元首相）に比べて、ソ連との国交回復のために、河野一郎さん（元農相）を使いましたが、吉田自由党外交に対して鳩山自民党外交は、日本の独自性を確立する努力をはっきり打ち出してきました。

現在の日本の外交路線は、その延長線上に続けられてきている。だから対米協調は日本外交の中軸の一つではあるけれども、その前に日本の主体性確立が鳩山（二郎）以降受け継がれてきていると、そう見えていいと思います。今の民主党外交が、「日本の主体性」というものを

堅持する」、そういう線において自
民党よりもろい。そして「友愛
外交」の名において、ようやく他
国との協調が表に出てきつつある。
その差が出てきたと思います。

鈴木 それは世代的な体験の違
いが大きいのですか。例えば中曾
根先生の場合は、それこそ戦争も
経験し、日本が敗れた後、日本を
復活させるんだということで政治
家になった。しかし、例えば菅さ
ん（直人首相）にしても、鳩山さ
んにしても、戦後生まれです。し
かも、1946（昭和21）年、1
947（昭和22）年生まれという
と、中曾根先生とは体験している
ことがかなり違うと思います。そ
の歴史的体験の差が、「軸」の有り
無しに出てきているのでしょうか。

中曾根 一例を挙げれば、沖縄

問題の体たらくですね。アメリカ
との関係の情報を正確に取ってお
けば、普天間問題について動揺す
ることはなかったと思います。自
民党の場合には、一貫して動揺し
ませんでした。ところが、鳩山・菅
の場合、特に鳩山外交の場合には、
「県外へ持っていく」と言った。県
外ということをも、先の見極めもな
く、さらに適地を見極めもせず、ア
メリカとの関係もまた配慮せず、
思い付くままに言った。非常に無
責任な外交的発言ですよ。外交の
常識から言えば、少なくともそう
いう基地を移転する場合には、ア
メリカ側との話し合いが十分にき
て了解がないうちは表明できない
はずですよ。そういうことも全く無
視して行われたので結果は失敗で
した。それで、元へ戻そうという

んだけれども、今度は沖縄の方が
逆反応して、元へ戻すのに相当、時
間と説得を必要とする。相当な努
力と成果を積み重ねなければ、元
には戻らない事態に陥ってしまっ
ていますね。これは鳩山外交大失
敗の例です。それは、外交の軸が
確立されていないところから来て
います。

鈴木 それまでの自民党政権の
外交が対米依存が過ぎるというと
ころから出発して、初めから「ア
メリカとは距離を置く」というよ
うな意識が大きかった気がしま
す。

中曾根 鳩山君の場合はそれが
あったんだろうと思います。アメ
リカ側の反応がこんなにも重く強
いものであるとは想像もしていな
かった。そこに「友愛」の甘さが

ある。私に言わせれば、シューク
リームみたいなものだ(笑)。

菅政権は信頼回復から

鈴木 鳩山さんは、結局、沖縄
問題でも迷走し、退陣しました。そ
の後を継いだ菅さんは、鳩山さん
の失敗を間近に見ていますから、
今のところ、「日米基軸」と言ってい
ますけれども、今後の菅政権の
対外関係、特に日米関係について
の懸念はありませんか。

中曽根 アメリカ側からいった
ん不信の念を持たれた民主党の菅
政権は、はじめから減点を背負っ
ている。これからさまざま外交
折衝をやる場合、話が詰まって
いった最終段階には信用されると
思うけれども、初期の段階では信
用されないと思います。何しろそ

ういう「前科」があるもんだから。

外交的な大失態をやったという反
省が、まだあまりないですね。要
するにナシヨナリズムで外交的成
果を上げてみよう、自民党との相
違を明確に見せて手柄を立てよう
という意図があったと思いますよ。

鳩山君が県外に固執しておったと
いう面を見ると、認識の間違いが
明確にそこにあつたと思います。

沖縄の基地問題は、東京で考え
て、政治家が政治の現象として考
えている以上に、吉田・岸内閣以
来刻んできた、非常に重く深いも
のがあるのです。そういう歴史的
経過も省みないで、「あれは自民党
がやったことだ。その欠陥をわれ
われは是正するんだ」と、その程
度の軽い気持ちで打って出てきた。
これは総理大臣としての第一歩は

失格ですね。

鈴木 鳩山政権がアメリカに与
えた不信感から、菅さんは始めな
くはないけない。つまり、信頼を
まず回復することから始めなくて
はいけないわけですね。

中曽根 そうです。

鈴木 これは厄介なことですね。
中曽根 だから菅君は、まず第

一にG8(主要8カ国)ムスコカ・
サミット(首脳会合)へ行つた際
に会談し、これを弁解してとりな
す仕事があつたわけです。だから
日本外交の固有の自主性、菅君が
年来持つておる外交政策論という
ものが表に出てこない。総理大臣
になつた者から外交政策論が出て
こないというのは、国として貧弱
であるし、国民としても悲しいこ
とですね。

サミットは 首脳のオリンピック

鈴木 菅さんが総理になられたとき、中曽根先生は「市民派政治家からステーツマンになるのではないか」という期待を漏らされていたことがあります。参院選が

終わって、今の政権をどうぞご覧になっておられますか。

中曽根 私は菅君に、「サミットに行った場合にね、独善的なものでは通らんよ。まず、味方を一人つくりなさい。そして、お互いが胸襟を開いて話し合って、サミットの間も助け合う」と直接話しま

した。一国あるいは一人、味方がいないと、会議体の場合は心もならないものです。

私はそういうことを心掛けたから、レーガン（元米大統領）、サッチャー（元英首相）という味方をつくれたわけです。そのために、それらの人々とは、手紙のやりとりとか、あるいは人の交流とか、表に出ないけれども、いろんな地道な努力を背後ではやっているわけです。それは味方を一人つくるための努力だと。しかし菅君はそういう努力を全然してないですね。

鈴木 それが首脳外交の要諦につながるわけですね。

中曽根 そうです。サミットの場合には、各国が利害関係を持って、また、各国のジャーナリズムが首脳部を見ているわけですから、



みんな肩を張って政治的な場所を占位しようとしています。だから「サミットというのは総理大臣、大統領のオリンピックだ」と私は言っている。菅君にはその話をし、まず味方をつくれと話したのですが、オリンピックで競争するんだという意識がほとんどないまま、臨んだんじゃないですかね。

鈴木 今の話を伺って、1983年のウィリアムズバーグ・サミット（先進国首脳会議）を思い出しました。レーガン大統領（当時）の「ソ連が中距離核戦力SS20をヨーロッパに配備した。それに対抗して、こちらの中距離核を配備したい」という提案について、フランスのミッテラン大統領（当時）が異論を唱えました。そして、中曽根先生はレーガン大統領を支

持するとおっしゃいましたが、レーガン大統領からすれば、中曽根先生を味方にできたということなのです。

中曽根 その前日に、私はレーガンと会食もして、「明日のサミット、あなたは議長として大変だろうが、私はできるだけ助っ人をするよ。あなたがピッチャーになるなら、おれはキャッチャーをやる。場合によっては、私がピッチャーになって、あなたがキャッチャーになるんだ。そういう関係で行こう」と言ったら、レーガンは「それはグッドアイデアだ。ロン・ヤスで行こう」と言い出したのです。「じゃあ、おれもオツケーだ」。それ以来、「ロン・ヤス」の関係が始まったわけです。

鈴木 サミットの場で連携プ

レーができる前に、中曽根先生はレーガン大統領との実際の交流などで、どのような努力をされましたか。

中曽根 今言ったような話めは前日の最後にやりましたが、それ以前から、レーガンから「サミットについて、よろしく頼む」というような意味の特使が来ました。それから私自身、その年の正月から8月のサミットまでの間に、レーガンに何回か手紙を出しています。その中で意見をかなり率直に述べておきましたよ。そういう予備行為がサミットの前には必要なのです。こちらはアメリカに親しい人を派遣したものです。加瀬俊一（国際連合加盟後、初の国連大使。後に外交評論家）、彼を先に派遣して、アメリカの世論につい

ていろいろな意見も聞き、「中曽根と
いうのはこういう人間だ」という
説明もさせました。

鈴木 レーガン大統領との信頼
関係はサミット前にできていたの
で、首脳外交をやったときは、もう
答えが出ているようなものですね。

中曽根 そうです。

鈴木 サミットは首脳のオリン
ピックだとおっしゃいましたが、
それまでの日本の歴代の総理はい
つも写真の端にるのが普通でし
た。中曽根総理の時はレーガン大
統領の横に立ったことがありまし
た。本来の並びはそういう順序で
はなかったということですが。

中曽根 写真撮影は外で行うの
で、会議場から写真を撮る場所へ
移動していったわけです。そのと
きに私は、会議場を出るときから

レーガンと話をしていたわけです
よ。それで撮影する場所へ行くま
でレーガンと話し続けていた。だ
から自然とレーガンの隣に立つて
おったわけだ(笑)。もし話を途中
で止めてしまえば、端に立たなく
てはならなかったかもしれない。
しかし、私自体の戦略もあって
(笑)、レーガンと長々といろんな
話をして、写真撮影する場所まで
一緒に歩いたのです。そういう戦
略もあるわけです。つまり、写
真を撮られるというのは大変なこ
となんです。それまで日本の総理
大臣がサミットに行つたときは、
いつも端に立っていた。そのこと
に国民は非常に失望していた。そ
れを私は現に知っていたから、「国
民にこれだけ税金を出してもらっ
てサミットにも出席させてもらい、

その税金を出している国民に悲し
い思いをさせることは政治家の罪
だ。自分はそういうことはやらな
い。国民にお返しする。それはレ
ーガンの脇に立つことだ」と。

鈴木 「政治とはこういうこと
だ」ということがよく分かります。
中曽根 そうです。だから、私
はサミットを政治家のオリンピック
クだと言っているわけです。

複雑化する世界情勢

鈴木 日本の戦略論についてお
伺いします。来年は、ソ連邦が解
体・崩壊してちょうど20年、そし
てもっと視野を広げれば、辛亥革
命から100年という年になるの
ですけれども、ベルリンの壁が崩
壊し、この冷戦後の20年間だけを
取ってみても、国際的な地殻変動

はかなり大きく、パラダイム転換というか、世界が大きく変わってきました。今の国際情勢をどのように認識されていますか。

中曽根 日本の戦後史を觀察すると、戦争に負けてから1993年までは大体、いわゆるアメリカ一辺倒というか、そういうかたちでやってきたと思います。冷戦の間は、それで済んだわけです。世界中が、アメリカかソ連か、どっちかに従っていたわけです。しかし、ソ連の崩壊が1991年で、1993年ぐらいには完全に崩壊したかたちになったわけです。それ以後は、米ソの二元的対立から多国間関係に世界が入ってきた。

鈴木 より複雑になったのですね。

中曽根 私はそういうふう

に認識していました。多国間関係になってきた。その中で日本がどういうふうに生きていくかという選択の余地は非常に広がってきた。それにもかかわらず、共産国というものは存在している。われわれが自由と民主主義と人権あるいは平和というような基本的価値を考えた場合に、自由民主主義の社会、その指導者であるアメリカは実力を持っていて、これと緊密な提携を保って、両方で助け合っていく関係だということです。

アメリカは世界的スケールでアメリカニズムを出してきているが、われわれは、少なくともアジアにおいて、日本の独自性を確立し、アメリカの世界以外のアジアの声を代弁する国家は日本であるというかたちの「日本像」を打ち出して

いかなくてもはいけないのです。

ヨーロッパにおいては、EU（欧州共同体）の中においてもフランスが先行して独自性を持ってきていましたね。ミッテランが中心になって、フランスがアメリカに対抗する言動をとっていました。日本はフランスとは違う立場だけれども、しかし、アジアにおける独立国家として、長い歴史を持った国家としての独自性を確立している点ではアメリカと肩を並べた同格の国家です。歴史は日本のほうが長い。そういう意識を持って、国家の価値から見たら、それは物力においてはかなわないだろうけれども、歴史とか人間の集団の価値から見れば、また文化の力から見ても、アメリカに対して絶対に負けていません。そのような日本の

代表として総理大臣は行くんだと、そういう私なりの考えを固めて持っていました。現在でも持っています。

鈴木 なるほど。冷戦が終わって多極化した中で、本来ならばもっと独自性あるいは主体性のある外交を展開しなければならぬ。それだけ外交的なオプシオンもあるのに、それをうまくコントロールできないのは、やはり日本の一番優れている「集団としての力・結束力」あるいは文化、そういうものについて日本人の意識が希薄になっているということでもあるのでしょうか。

中曽根 ヨーロッパではフランスが、「文化」というものを見て、アメリカはフランスよりも一落落ちる国だ」と見えています。ミッテラ

ンは、そういう考えを持っていたと思います。それは文化の力ですよ。それから歴史の力ですよ。

そういう面から見れば、フランスに負けない文化の力と歴史の力を持っているのは、アジアでは日本です。その上に科学技術力を現在持っている。そういう面において、フランスが独自性を持っているように、日本もアジアにおいて対米的にはそういう同格のものを打ち出していかなければ、独立国家あるいは歴史を持った古い国家としての名誉が果たせない。総理大臣はそれを背負っていく責任があるんだ。そういう明確な意識を持っていました。

中国とどう付き合うか

鈴木 そこで、もう一つの巨大

国家である中国との関係が問題になると思いますが、太平洋をはさんでアメリカと向き合っている中国との付き合い方は、今後どのようにしていけばよいのでしょうか。

中曽根 中国との関係は、まず、約2000年におよぶ日中関係の歴史をよく勉強する必要があります。そして、中国の歴史や、特に中国民族というものをよく社会的にも勉強する必要があります。学者からその知識を得る、あるいは経験者からその知識を教えるもろう。それが政治家にとって一番大事なことです。

私はそういう点では徳富蘇峰から教えられましたよ。終戦直後、熱海の徳富のところへ5回ぐらい行っています。彼は、ご存じのように追放されたナシヨナリストで



すが、日本文化については最高の権威者であった。だから、徳富さんのところに行って会いました。追放中の人のところに行くのは、現役政治家としてはちょっとまづい面があったけれども、そんなことは遠慮しないで行きました。徳富さんは非常に喜んでくれました。しかし、あの人は顔面神経痛

1時間いて、帰ってくる。そういうのを5、6回やりました。朝、東京・九段の議員宿舎から抜け出して行ったものです。
鈴木 そのときの話は、その後の中曽根対中外交に生かされているわけですね。
中曽根 非常に生かされています。徳富さんは、どちらかと言う

の病気があってね、午前中1時間ぐらいしか会わないんですよ。午後はもう休んでしまふ。だから、朝6時の列車で熱海に行つて、10時ごろお宅へ行つて、小

と大東亜戦争を支持した方だった。しかし、彼は戦争に負けて、悔悟の中にあつたわけです。だから、彼が言うには、「中国とは仲良くしなさいよ。日本が中国にかなり迷惑をかけたということも、事実として認識していないといけませんね。そして仲良くしなさいよ」そういう言葉を言いましたね。私も、もちろんそういうことだろうと思つていましたが、徳富さんがそう言つたことが頭の中に入つて、勉強になりましたね。

鈴木 なるほど。ただ、さはさりながら、最近の中国の膨張主義、また、海軍の外洋化については、日本のメディアだけではなくて、国民の中にも脅威論があると思います。世界各国にとつて、いかに中国と付き合うかというのは、21世

紀最大の課題だと思えます。戦略的には、例えば、日本はインドとも密接な関係をつくった方がよいのではないかとか、太平洋を挟んでアメリカ、オーストラリアなどとの海洋国家としての連携を強めていけばよいという声がありますけれども、中国の脅威論に対してはどのような対応をしていけばよいと考えていますか。

中曽根 海洋国家論というものは、日本の地政学的側面から、当然、学者が考えることであるし、それは一部当たっているところだけけれども、中国との問題は隣同士の関係で、歴史の刻みがうんと複雑なものです。相手は人口においても国富においても大国です。そして、この国は中国に対して、ある意味においては侵略的行為もやっ

た過去がある。そういう関係の中で、どういうふうに中国と日本との関係を良好に維持していくか。

まず、一方においてアメリカというものがある。そこで、アメリカとまず手を握る。「右手でアメリカと手を握り、左手で中国と手を握る」私はそういうことを言ってきた。そういうやり方で、日本の存在、日本の地位を保全もするし、発展も考えるし、平和も維持する、そういう考えに立つ必要がある。アメリカ自体は中国と事を構えるという意識は毛頭ないですね。ただ、中国のイデオロギー的な、あるいは国際常識に反するようなことについては、アメリカは国際秩序を維持する世界国家の面からも、きちんとすべきものはきちんとするということ、そういう厳然たるもの

は持っています。そういう点については日本も同調する考えを持っている。

しかし、隣国としての礼儀と言いますか、隣国というものは特別のそういう礼儀関係を持たなければ成り立っていかない。普通の国際関係プラス、礼譲というのが必要です。それを意識することが、両国のトップにとって一番大事なことです。単なる国際関係ではない、隣国関係、しかも過去においてはいろいろ、いきさつのあった隣国関係。そういう面で日本の政治家がどういうふう中国と付き合って共存していくか、互恵の友好関係を維持していくかは、政治家の一番大事な仕事であるし、器量を要することです。

私はそういう感じで、アメリカ

を第一として、レーガンや、そのほかとの提携をまず本物にする。同時に、中国との関係においても、そういうことをやる。その中心は何であるかといえば、トップ同士が信頼感を持つことです。トップ同士が友情を持たなくてはだめなのです。だから、トップ同士が役所で会うだけではなくて、自分の家や別荘に招いて、お互いが話し合う、そこまで行かなくてはだめだと言っているのです。

アメリカの場合は、われわれが行ったときは、ホワイトハウスのほかに、キャンプデービッドできちんとエンターテインしてくれます。日本の場合も、単に官邸で話をするだけじゃなくて、私の場合は、中国の胡耀邦（共産党総書記）が来たときに、公邸に招きました。

官邸での食事のほかに、公邸でも家族付き合いをやったわけですよ。それが非常に彼らにいい印象を与えたらしい。レーガン大統領を日の出山荘に招待して以降、韓国の全斗煥大統領、ソ連のゴルバチョフ大統領も招待しています。だから、国家間の関係では、トップ間の信頼感と友情が一番大事な問題になる。

鈴木 外交というのは、それが基礎になくはないわけですね。

中曽根 トップ同士がそういう信頼を持って、友情を持つようになると、外務大臣以下、各大臣が一番やりやすくなる。そしてトップ同士のやり方をみて、それをまねする。外務大臣同士がまた同じようにやったわけですよ。

鈴木 特に隣国である中国とは、そのような付き合いが必要になってくるわけですね。

中曽根 そうです。そういう家庭的付き合いというものを向こうの人は非常に高く評価する。そういう「急所」を知らなくてはだめです。

鈴木 民主党政権になってからこの一年間、対中、対中と言いますけれども、中曽根先生がおっしゃるような付き合い方にまで行っておらず、しかも、ムスコカ・サミットで菅総理が「G8の中に中国を入れたらよいのではないか」といきなり言ったといえます。その持ち出し方などを見てどうお感じになりましたか。

中曽根 私に言わせれば、あれは「藤四郎外交」です。そんな思

い付きを軽々に言うべきものではない。G8というものは、日本だけではないのですから。また、アメリカだけでもなく、ほかの6、7の国がある。その国々が賛成しなければ、それは実現しないものです。そんな思い付きで言って、すぐできるような問題ではない。そんな軽はずみな表現で物を言ったら、将来の可能性まで壊してしまいます。そういう外交的な配慮が欠けているのですね。

鈴木 中曽根先生は常々、日米中の首脳が集まる機会をつくるべきだと言っておられます。実現するためにはどうすればよいのでしょうか。

中曽根 サミットができて、一応の固まりはできたけれども、その中で「日米中」を結ばせる。日

米はできています。日中もできています。米中もできていますのでね。ところが、3国はできていない。それをやるには、まずアメリカともっと深く話し合って、方法論について、どういうふうにしてこれを実現しようかと、相談して一致したものをつくらなくてはだめです。それができたら、今度は中国側とやろうじゃないかと。この3国に共通して利益になることをまず取り上げるのです。利益になることで3国が集まれば、話はどうまくいくでしょう。それが何であるか、そういうものを外務当局に勉強してもらおう。その成果の上で、まず外務当局で下話をやってもらおう。3国間でそれが成就したら、今度はトップに持ってくる。そういう段取りが必要です。それに

はまず、アメリカとの間でそういう緊密なやり方について打ち合わせを成功させる必要があります。

鈴木 まず信頼関係ができないといけないわけですね。

中曽根 そうです。

鈴木 そして、アメリカがやはり国際政治の中では力があるということのを率直に認めなくてはいけない。そこが出発点でなければいけないのですね。

中曽根 そうです。そういうやり方については、中国は理解しますよ。突然に中国に来たって話ができるものではないと分かっている。中国が乗りやすいかたちで努力していると、そういうふうに取り組んでしようね。

(2010年7月21日収録)